
江戸川コナン、再び

味醂林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸川コナン、再び

【Nコード】

N9633N

【作者名】

味醂林檎

【あらすじ】

江戸川コナンこと工藤新一は、灰原哀と服部平次と共に組織を壊滅させた。APTX4869の解毒薬を哀は完成した。コナンは解毒剤を飲み、蘭に会いに行く。それから20年後。蘭と新一は結婚していて、3人の子どもが出来ていた。ある日、新一は風邪をひいてしまう。風邪薬を飲んだ途端に、体が熱くなった。気が付いたら、幼児化していた——20年前のコナン正体・黒の組織の残党・3度目の帝丹小学校。20年前に動くはずだった歯車が今、動き始めている。

プロローグ

江戸川コナンこと工藤新一は、灰原哀と服部平次と共に組織を壊滅させた。

APTX4869の解毒薬を哀は完成した。哀は、コナンに薬を飲ませる前に自分の本当の気持ちを言った。

「工藤くん…ずっと、あなたが好きだったの。付き合ってくれるかな…」

「ごめん。灰原。俺は…蘭以上に思えない。ごめんな」

「そう…なら、いいわ」

哀は、そう言うとともに薬を渡した。コナンは、薬を飲む。

あのすごい痛みに襲われた。

「ああああああああああ」

コナンは、新一に戻るとすぐに蘭のところに向かおうとした。

「待って…工藤君」

「何だ。灰原…」

「江戸川君の方は、どうするの？」

「あつ…」

新一は、すぐに蝶ネクタイ型変声機を取り、毛利探偵事務所に電話した。

「もしもし」

毛利蘭だった。

「蘭姉ちゃん。僕ね、母親のいるところに帰らないと行けなくなっただ」

「ちょ、コナン君」

「僕の荷物は、博士ん家に持ってきて。その頃、僕は東京にいない

と思うから」

「コナン君…」

「大丈夫。蘭姉ちゃん。いつか、会えるよ。じゃあね」

「あっ…」

蘭は何か言いかけようとしたが、遅かった。新一はすぐに電話を切つて、毛利探偵事務所に向かった。

毛利探偵事務所の前で、うろちょろしている蘭の姿があった。

「蘭!!」

蘭は、新一の姿に気づくと走って駆け寄ってきた。

「新…一なの…?」

「ああ」

二人は抱き合った。

プロローグ（後書き）

どうも、味醂林檎です。

初投稿です。コナンの漫画は1〜29巻。47・48巻しか、持っていないので大まかなことしかわかりません。アニメは、6時代になつてから見逃してばかりです。映画は、たぶんほぼ見えていると思います。

1、20年後

新一と蘭は20歳の若さで結婚した。

新一は、探偵職に専念して、蘭は専業主婦として。

新一と蘭は、気づけば37歳になっていた。

子どもは三人。年齢は、高校一年生の工藤和夫と中学生二年生の工藤凜、そして小学一年生の俊一。

ある日。新一は、風邪をひいてしまった。

蘭は、風邪薬の買い置きがないのを知ると出かけて行った。

今、新一はベットの上で寝ている。

10分前から、咳が続いている。

新一は、最後の風邪薬を飲みこんだ。

その時、体全身が熱くなり痛みが襲って来た。

（これは…20年前のあの…症状と一緒にだ…まさか、幼児化するなんて…）

新一は、薄れていく意識の中で思っていた。

「わああああああああああああ」

幸い、家に誰にもいなかった。

1 '20年後（後書き）

何故、20年後なのか？

10年後の方がいいと思う方もいると思います。

だけど、ちょっとした江戸川コナンの事情で20年後にしました。

2・哀の推測（前書き）

急展開ですいません。

2・哀の推測

気がつくと、体が縮んでいた。

（まさかな…本当に幼児化なんて…）

そう思いながらも、すぐに行動に移した。

（蘭には、俺がコナンだなんて言っていない…）

風邪はまだ治っていなかったが、隣に住む阿笠博士の家に向かった。

（多分…今日は、灰原がいる日だったな…）

新一は阿笠博士の家のチャイム鳴らす。

「誰じゃ？ 新一か？」

「そうなんだけど… 博士、出てきてくれないか？」

「どうしてじゃ？」

「いいから！」

博士はすぐに出てきた。新一の姿を見る。

そこには、幼児化した新一の姿があった。

哀は何事かと思いつつも、出て来る。

まっすぐに、新一の姿を見た。

そのあと、博士と哀にこの姿になったきっかけを説明した。

「もしかしたら、風邪薬の成分が解毒剤の成分を食ったのかも知れないわ」

「でも、風邪薬は今日の日以外飲んでいるぜ」

「たまってたのよ!」

「たまってた?」

「風邪薬の成分が、解毒剤の成分を覆いつくしたのよ。そして、ついに解毒剤の効き目がなくなり、幼児化した」

「そうか… 灰原、解毒剤を作れるか?」

「そんな20年以上前の薬を、簡単に作れるわけないでしょ。半年はかかるかも知れない」

「じゃあ、俺は半年の間どうすればいいんだ?」

「帝丹小学校に入学すればいいんじゃない?」

「はあ!」

「工藤君。その格好で、半年うつけないでしょ? 小学一年生らしく学校通いましょう。それと、江戸川君の服はまだ残っているわ」

「どこにある」

「地下室にある。ダンボールに江戸川コナンと書いてある」

新一が地下室に向かう。哀は、懐かしそうな表情でそれを見送る。

「ねえ。博士。工藤君。江戸川君って言っても、反応しなかったよね?」

「まあ。名前を考えるのを、めんどくさいからのお。江戸川コナンで出してくる」

「そうね。江戸川コナンを知っている人には、『江戸川コナンは僕の父親で、僕が生まれる前に死んで母親が悲しくて父親の名前を付けたんだ』とか理由をつければ、誤魔化せるはずだから」

ちょうど、新一は“江戸川コナン”と書かれたダンボールを抱えて戻ってきた。

「博士、今の話し聞こえたぜ。江戸川コナンと名乗ればいいんだろ

？」

そう言いながら新一：「コナンは、ダンボールの中をあさる。目的の物が出て来た様で、博士に言う。」

「蝶ネクタイ型変声機。まだあつたんだ…」

コナンは思いだしていた。20年前のことを。

2・哀の推測（後書き）

やりたい放題です…（汗）

3・蘭と江戸川コナン

20年前。黒の組織にAPTX4869を飲まされて、幼児化していた。

幼馴染の蘭のところに、居候をしていて蝶ネクタイ型変声機を使い毛利小五郎を眠らせて推理をしていた。それと、蝶ネクタイ型変声機を使い、電話越しで蘭と話していた。

少年探偵団のことも。全て。今でも連絡取っているが大阪の探偵・服部平次の出会いのことも。

コナンは蝶ネクタイ型変声機とついでに腕時計型麻醉銃と犯人追跡メガネを見つけた。

20年前の通りにしてみる。

時計型麻醉銃を腕首につけて、犯人追跡メガネをかける。蝶ネクタイ型変声機を、ポケットにしまいこんだ。

さらに、コナンはキック力増強シューズを探して履き、どこでもボール射出ベルトもつけた。

「これで、江戸川コナンの完成だ」

コナンはそう呟いた。

「案外、切り替えが速いのね」

「別に。諦めたただけだ。今の灰原、忙しいだろ？それに、黒の組織はもういないんだし」

「ええ…そうね」

哀は困惑気味に言う。

それから、ドアを開ける者がいた。

「阿笠博士。新一知らない…あれ、コナン君？」

蘭だった。新一を探しに来た蘭。

蘭は硬直していた。27歳ぐらいであるはずのコナンは小学生の姿をしていた。

哀は、コナンに耳打ちした。

「蘭さんの中のコナン君は、今。27歳ぐらいよ。だから…」

哀が全て言う前に、コナンは言った。

「あれ…何で、僕の名前を知っているの？知らないおばさん」

「知らない…コナン君、私のこと覚えてないの？毛利蘭よ。今は人妻だけど」

「毛利蘭…どこかで聞いたことある様な…そう言えば、今はいない死んだ父さんだけ。一年生の時、新一さんの幼馴染の家に居候していたって言うていた気がする。僕ね、父さんの名前と同じコナン何だよ」

「コナン君が死んだの！」

「うん。事…事故で亡くなったんだ。母さんは、外国行ってしまつて…それで、阿笠博士の家に居候することになったんだ」

阿笠博士は、驚いた顔で言った。

「ちょ、聞いていないぞ、し…コナン君。まだ、居候するって決ま

「つてないじゃろ？」

明らかに阿笠博士は、また毛利蘭に江戸川コナンを預けようという本心が見え見えだった。

「今、決まったよ。博士」

コナンは阿笠博士に小さい声で言う。

「それと、蘭の家に居候なんてもうこりこりだ」

3 ・蘭と江戸川コナン（後書き）

新一よりコナンが好きなんです。

4 蘭の家に居候

蘭はコナンの事情はわかったものの。新一の事情がわからない。阿笠博士なら知っていると置いて来ていたからだ。

（そう言えば…コナン君は、新一の遠い親戚だっけ。ここに居候すると決まっていなかっただし、しばらくは私の家で預かってみようかな。20年前のコナン君そっくりだし）

「ねえ。コナン君」

「何、蘭…さん？」

「私の家で良かったら、居候してみない？」

コナンは微妙な気持ちだった。蘭の家は工藤新一の家で、工藤新一本人はコナンなのだ。

それに、また一緒に風呂入ることになるかもしれないと思うし、3人の子どもがいる。

「コナン君が、良ければ私の家に来ない？」

「でも。蘭さんには、蘭さんの家庭があるじゃないですか」

「家庭ね。そう言えば、阿笠博士。新一知りませんか？」

阿笠博士は、首を振る。コナンはちょっと慌てた。哀は、それを冷静な目で見ている。

「そうですか…何か、20年前のあの時と一緒に。新一が消えたと思ったら、コナン君が現れて。もしかして…」

「新一さんは、僕に電話を掛けて来たよ。厄介な事件があるから、しばらく会えないって」

「でも、何でコナン君には電話掛けるのかしら」
（電話すんの、忘れたー）

「僕と新一さん、たまにあってたんだ。父さんと仲良しだから」
「そうだったんだ。それで、コナン君。私の家に来ない？」

コナンは考えるふりをしていた。実際、答えは決まっていた。

「行きたいな。父さんが、蘭さんのところに居候していたし、突然別れて後悔していたから」

「じゃあ、決定ね。コナン君。荷物あるなら、準備して」

コナンは、数分前持ってきたダンボールにガムテープを貼り、手に持った。

「それだけ？」

「うん。僕の物は、全部ここに入っているんだ」

（このダンボール箱に、コナンの携帯が新しくなってる。きっと、灰原か博士が交換したんだろうな）

工藤邸につくと、蘭はコナンに「待ってて」と言った。コナンは、その通りに待っていた。

（まさか…コナンの姿で、ここに居候とは…な）

4 蘭の家に居候（後書き）

曾祖父の兄の娘のイトコの叔父の孫の息子が今のコナンだと思います。

5・2度目の居候生活スタート

「入って」

蘭の声の通りに、ダンボールを抱えながら入って行く。
そして、靴を脱ぐとダンボールを置いた。

「お父さんの遠い親戚の江戸川コナン君。小学1年生」

「初めまして。新一さんとは、曾祖父の兄の娘のイトコの叔父の孫の息子にあたる江戸川コナンです。色々な都合があり、新一さんと蘭さんの家に居候することになりました」

相変わらず、演技が得意なのは変わっていないようだ。

「コナン君。私の息子・娘紹介するね。まずは…」

「俺は、工藤和夫を高校1年生。父さんを超える高校生探偵を目指している」

（俺を超えるには体が小さくならないように、気をつけな）

「私は、中学二年生で工藤凜。凜姉ちゃんって言ってね」

（蘭姉ちゃんの変わりか…）

「そして、最後に工藤俊一。コナンと同じ小学1年生だ」

（息子に呼び捨てされる気分は、妙だな）

「そっか。俊一とコナン君は、同級生か。コナン君の部屋は、俊一と一緒にいいね」

「あ、うん。いいよ」

ダンボールを抱えて、蘭を先頭に俊一の部屋に向かう。

「コナン君は、折りたたみの机と布団でいいね？」

「うん。いいよ」

（居候の身は、狭いからな）

俊一の部屋にコナンのスペースを作ると、蘭は2人が仲良くなるように部屋を出て行った。和夫と凜もつられて出ていく。

「俊一くんでもいいかな」

「俊一でいい」

「……………」

「……………」

2人は沈黙した。何て話せばいいのか、わからなかった。

「コナンって、変な名前だね」

俊一がしびれを切らして話した。

「悪かったな…変な名前で…えっ？ 親が大のホームズファンだから」

「ふ〜ん。君はホームズを読んだことあるのかい？」

「読んだ」

「全部？」

「全部」

「ふ〜ん」

（そう言えば、服部にばれたのはホームズフリークの時だったけど…）

「どこから、来たの？」

「うん？ えつと… 横浜から来たんだ。母さんが、今外国にいるんだ」

「本当に？」

「うん。ほんとーに」

（実際、57歳の母親は外国にいるからな）

「僕ね。お母さんから、江戸川コナンっていう男の子が居候していた話を聞いたよ。たまに、お母さんがピンチの時。お父さんの変わりに助けに来ていたって」

「そりゃーそうさ」

「…何か言った？」

「べ、別に何も」

「それで、突然消えちゃって悲しかったって。でも、新一が戻ってきてくれたから悲しさも次第に消えていったって」

俊一は、小学1年生なのに妙に頭が冴える。コナンからすると、光彦タイプだ。

「だから、僕。そのコナンが、新一じゃないかって言ってみたんだ！」

「え、僕のお父さんが新一さんだって？」

「だけど、お母さん否定したんだ。新一がコナン君じゃない。新一は、半年間ほったらかしでコナン君はいつも守ってくれたから」

俊一は1回、話を切って話を続けた。

「もし、新一がコナン君だったら今からでもいいいぶつ飛ばしてやりたいなって」

（ばれちゃいけないな）

「ま、君がお父さんの訳ないよね」

「う、うん。僕が、新一さんの訳ないよ」

「……………」

「……………」

「俊一。ちょっと、手伝ってくれない？」

蘭が俊一を呼ぶ。きつと、夕ご飯の手伝いだろう。

「はい」

元気よく返事をしながら、この部屋から出て行った。

コナンは出ていくのを確認すると、自分のダンボールの中に入っているコナン用の携帯を取り出した。電源は切つてあるため、電源をつける。オートロックがかかっていた。

（大体、最初のロック番号は1111か1234だろ）

コナンは、ロック番号を知らない為、推理をしながらロック番号を入力する。しかし、どちらともロック番号が違いますと表示された。コナンはそして、自分の誕生日を入力したがロック番号が違いますと表示される。

（全部の数字を入力するのは、大体8時間以上はかかるんだ。もしかして…）

コナンは、4・8・6・9と入力した。見事に解除され、メールが来ていることがわかる。

（誰からだろ）

メールをコナンに送信した相手は灰原哀だった。

6・哀のメール

『件名 これを読んでいることは

これを読んでいることは
きつと、幼児化している
ときでしょうね。

あとから、わかったこと
だけど、解毒剤は完全じ
やなかったの。

私は、それを後から知っ
た。工藤君に話そうか話
すべきか、迷っている内
に時間が過ぎていく。

A P T X 4 8 6 9 は、ある意味。
完全な毒薬だったのかも
知れない。

それは、永遠に染みつい
た毒薬。解毒剤の効き目
が切れると幼児化してし
まう毒薬。

私とあなたは、永遠にそ
れを十字架みたく背負っ
ていく。

これ以上、私たちみたい
な犠牲者を出したくない。
黒の組織の残党が、いつ

か行動を開始する。

それだけは、覚悟して欲しいわ。

工藤新一君。

灰原哀より

□

コナンが黒の組織がもういないといった時、哀は困惑気味に言ったのはこれのことだったのかとコナンは思いだしていた。

「奴らの残党が、俺や周りの人間を巻き込む知れねえな。20年前のあれは、まだ決着がついていなかったのか…」

コナンが後悔している。20年前。新一として、蘭に会いに行くことに焦って完全に倒さなかったことを。

「これじゃあ、探偵失格じゃねえか…」

6 哀のメール（後書き）

3人の人に、お気に入り登録していただきました。
ありがとうございます。

7・3度目の帝丹小学校

組織の残党がいつ行動することを知ったのは4日前〓居候生活4日目の朝。

コナンは、3度目の帝丹小学校に入学することになった。

ランドセルは、博士が奇跡的に20年前のを残していたのでそれを使うことになる。

「じゃあ、俊一。コナン君と一緒にのクラスになったら、学校案内よろしくね」

「はい」

「蘭さん行つてきます」

帝丹小学校に向かう。コナンは、3度目の入学で行く道は大体わかっており俊一を置いてさっさと歩いて行く。昨日、転入手続きを行い、自分の下駄箱と自分の担任の先生を教えてもらった。何と、コナンの担任の先生はかつて少年探偵団として仲良くしていた円谷光彦だった。光彦は、やはり驚いていたが博士が「その江戸川コナンの息子」と誤魔化したのがせめての救いだった。

コナンは、下駄箱に靴を入れて職員室に向かう。俊一は、コナンが当り前の様に行つたのを違和感を抱いたが、1年B組の教室に入る。

「おう。俊一。今日、転校生が来るそうだな」

元太と歩美の息子・太郎がいう。

「どういうタイプかな？」

そう言うのは、20年前の少年探偵団で言う歩美タイプだと思う田中未来。俊一は、どうやら光彦ポジションみたいだ。

「俺達、少年探偵団に入ってもらおうぜ。お父さんたちの時は、裏リーダー的な存在がいたらしいからな」

太郎がそう言った時、教室のドアが開く。コナンがむすつとした顔で光彦先生の横で並ぶ。コナンがむすつとした原因は、光彦先生にあったのだ。

「皆さん。転校生です。江戸川コナン君。自己紹介を」

「えっ！。両親の都合で、米花町にやって来ました。江戸川コナンです。よろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「どこの席が空いているかな…」

皆は後ろの席を見た。俊一の隣が開いていた。コナンは、俊一の隣の席に座った。やはりむすつと顔をしたままだった。

7・3度目の帝丹小学校（後書き）

光彦は独身ですが、バツイチで再婚しようかと考えているときにコナンが来ました。

元太と歩は結婚しています。

光「一体、誰と再婚させようと考えているんですか！」

作「今は、秘密です（考えてない）」

さてと、9話あたりから急展開の連続だと思えます。

8 名探偵光彦

コナンが職員室から光彦と2人で1年B組に行っていた時のことだ。

「コナン君。君は、工藤新一兄さんだね」

「な、何を言っているの光彦先生。僕は、コナンだよ」

「少年探偵団、覚えてますか？ 元太君たちや歩美ちゃん達と一緒にやっていた」

「し、し、知らないよ」

「君は、20年前に消えた江戸川コナン。僕たちが知っているのが、君のお父さんじゃない。君は、工藤新一だね」

「…ち、違うよ」

「なら、蘭姉さんにコナン君が江戸川君だということを話しますよ。それに、そのメガネは伊達眼鏡でしょ」

「…わあーったよ。光彦。確かに俺は、工藤新一だ。20年前のコナンと同一人物だ。もちろん、少年探偵団も覚えているよ」

「やっぱり、そうでしたか…」

「とにかく。光彦。俺とおまえは、初対面だ。俺は、光彦を担任としか見ない。かつての同級生と思わない」

「僕だって。奇妙なことに巻き込まれたくないですからね。何か、訳ありで蘭姉さんのところに居候していたみたいですからね」

これが、コナンのむすつとしていた原因だ。光彦にはれてしまったのだ。

隠し通せると思ったけど、以外に光彦は有無を言わせない声で淡々と喋る。コナンが、新一だと確信したものがあつた。それを察したコナンは、案外早くばらしてしまったのだ。

いくらか、光彦はコナンと新一に関する接点があることに気がついていた。

1つめは、新一がいなくなった日にコナンが現れたこと。2つめは、俺を小さくしやがった黒ずくめといったこと。3つめは、小学生の頭ではないことだ。

それに、阿笠博士がたまに「新一」と呼ぶことや服部平次が「工藤」と呼ぶことにも説明がつくのだ。4つめは、コナンがいなくなった日に新一が現れたこと。最後に、新一がまた消えて江戸川コナンが現れたこと。

8 名探偵光彦（後書き）

作者より フリートーク

この二次小説の登録者数が5人になりました。
ありがとうございます！
完結させるように頑張ります。

9・ベルモット

3度目の帝丹小学校入学の放課後。元太の息子・太郎をリーダーに俊一・未来の少年探偵団に誘われた。

「コナン。入らないか」

「コナン君、入らない？」

下駄箱のところで誘われている。太郎の下駄箱に“少年探偵団”の張り紙してあった。

太郎は自分の下駄箱を除いて見たが、何もないようだ。

「いつもは、入っているんですけどね」

俊一は慌てて訂正を加えていた。そのあと、太郎と未来に別れ俊一と2人きりで下校。長々と沈黙していた。コナンは、そのまま阿笠博士の家に行こうと考えていた。蝶ネクタイ型変声機がちよつと壊れていたからだ。さすがに、20年のタブーで使えるとは断言できなかった。一方、俊一は急に現れたコナンをずっと見ていた。授業中、呆れた顔で勉強していたし、光彦とも何かあったみたいで避けていたみたいだった。

「コナン。どうして、朝。1人で学校に行ったんだ。初めての登校なのに。道に迷わなかったの？」

（とても、卒業したからだとはいえないな）

「うんーと。僕、方向感覚いいから」

「ふん」

疑いの目でコナンを見る俊一。コナンは、何だよその目はという目で見る。

工藤邸がもうすぐのところ、コナンは前から来る女性に話しかけられた。

「久しぶりね。cool guy」

「ベ…ベルモット！ どうしてここに」

「話したいことがあるのよcool guyにね」

俊一は、ベルモットと呼ばれた女性にコナンがどうしてcool guyと呼ばれているのか気になった。そして、この2人の関係について。

「周りの人の命の危険…あなたも分かっているわよね」

「灰原から聞いた。組織の残党が動いているとね」

「シェリーはそこまで、わかってるのね。cool…いや、工藤新一。私は、いつまでも組織を裏切る訳にはいかないの。今は、見逃してあげるわ。でも、いずれ私が工藤新一を殺さないといけないの。シェリーに、戻るなら今のうちと伝え上げてね。じゃあね。cool guy」

ベルモットがそれだけ言うと、さっさとどこか行ってしまった。コナンは工藤邸を通り過ぎて阿笠博士の家に入ろうとしたその時。

「コナンは…お父さんの？」

俊一が叫ぶ声がした。コナンは、首を振ってつけたした。

「違うよ。勝手に、ベルモットが僕のことを工藤新一と呼ぶんだ。普段はcool guyなのにな」

「でも、どうしてだよ。灰原さんのことを呼び捨てにするんだ！」
「…その理由を話すには、俺のことや組織のこと。全て話さないと
いけない。でも、このことを話したら、俊一が命の危険にさらされ
るだけだ」

このときのコナンの声は、小学生とは思えない声で発言していた。
俊一は、コナンは普通の小学生ではないと確信を深めた。それに、
いつかコナンがこの“命の危険”について話すような気がした。

10・急な訪問者

蝶ネクタイ型変声機を博士修理してもらったため、俊一に奇妙な発言したあとすぐに阿笠邸に入って行った。俊一は、呆然としながら工藤邸に帰って行った。

「博士―蝶ネクタイ型変声機を修理してもらいたいんだけど。大丈夫か?」

「大丈夫じゃよ。新一」

「それと、灰原いるか?」

「留守じゃ。君と違って、仕事が忙しいからのぉ」

「は…はは」

阿笠博士はすぐに、蝶ネクタイ型変声機の修理に取り掛かった。7歳という年齢であるが、阿笠博士は馴れた手つきで修理をし始めている。コナンは、その間これからのことを考えていた。

まず1つめは、蘭のこと。この20年、急に家を空けることが多い新一だったが、一か月も空けることはなかった。だけど、哀が解毒剤を作るには半年はかかるという。20年前みたいに、蝶ネクタイ型変声機を使い電話越しで話すことは出来るが蘭に20年前のことを思い出させてしまい、コナン＝新一だと考えられる可能性は少ないのだ。せつかく、20年間隠し続けた真実だ。今、正体を明かすのはいけない。でも、20年という時が経てば蘭も許してくれるのではないか。という考えが浮かんだが、コナンはすぐにその考えを没にした。むしろ、20年も隠してきたことに怒るのではないかと。どちらにしろ、いずれは言わなくてはいけない真実だった。

2つ目は、組織についてだ。ベルモットについてさつき会ったばかりだ。しかし、組織の尻尾はまだ掴めていなく壊滅させるには結構時間がかかる。なるべく、犠牲者を出させない方法で壊滅させようと

考えるが、20年前の方法では、中途半端に終わってしまう。だから、じっくり時間を掛けて完全に組織を壊滅させようと思っていた。これ以上、体が小さくなる被害者が出さないように。

「新一君。修理が終わったぞ」

「お、サンキュー博士」

コナンは蝶ネクタイ型変声機のダイヤルを回して新一の声を出した。実は、新一の声がちょうど壊れていて、出せなくなっていたのだ。これで、安心して蘭に電話が出来る。コナンが蘭に電話を掛けようとした時、家のドアが開いた。

「よー工藤！ 元気に…しとつか」

肌が色黒で関西弁。しかも、コナンに工藤と叫ぶのはこの世に1人しかいなかった。

「工藤：お前、小さくなってるんか！」

「見ればわかるだろ。服部」

「見ればって…また、あの姉ちゃんをまたせる気か」

「しゃーねだろ。小さくなったんだから」

「姉ちゃんに言ったのか？」

「言ってるよ。組織がいるんだからな」

「組織は20年前に壊滅させたのちゃうんか？」

「実はな…」

コナンは服部平次に、組織の残党のこと。小さくなった原因と、ベルモットに会ったことを全て話した。

「そういうことやったんか…」

「だからさ、話してはいけないんだよ。蘭には」

「姉ちゃんには、じゃなくて息子たちにもだろ」

「それより…服部、どうして急に」

コナン平次が、持っているスポーツバッグを見ながら質問して来た。

「実はな…和葉と喧嘩してしまったんや。居ずらくなったんで…」

「はあ〜ん。つまり夫婦喧嘩か」

平次と和葉は結婚している。現在、平一という子どもと葉月という子どもがいる。平次は立派な父親だ。

「だから、落ち着くまでここに泊まろうと思ってたのか」

「そうなんや」

「悪いーな。俺は、工藤家に居候中だ。服部は、ここで泊まれよ」

「ちよつと、新一君」

「博士。俺、帰るわ。じゃあな」

コナンは平次の件を博士に押しつけて、工藤邸に戻って行った。

「ただいま」

「おかえりーコナン」

和夫の声だ。コナンと和夫はこの四日間で仲良くなっていたのだ。理由は、和夫が話すことがわかるのはコナンだけだったのだ。凜や俊一に話しても意味がわからないという顔をされるのだ。だけど、コナンの正体は新一なので意味がわからなかった。この四日間、コナンは学校の転入手続きが終わっていなく工藤邸にいるしかなかった。昼間は蘭と他愛のない話をして、夜は和夫と話す。こんな感じに四日間は過ぎて行った。一方で、コナンはこのままでいいのか

と冷静に自分の姿を見て苦笑していた。

「コナン、遅かったけどどうしてだ」

「うん…と。博士ん家に行ってたんだ。博士がいつお母さんが帰ってくるかって、聞きに行ってたんだ」

「で、どうだったんだ」

「…もう帰ってこれないというんだ」

「そう…か」

和夫の性格はとても新一に似ていた。もし、新一とコナンが別人ならこんな会話をしていただろうと思うような会話もあった。

11・チケット2枚

コナンは和夫の部屋で、色々と盛り上がっていると蘭が入って来た。

「ねえ。和夫、明後日。コナン君とトロピカルランドに行ってみたら。ほら、この間。家族みんなで行った時。新一と和夫は来なかったじゃない？ そのチケットが2枚余っているから。明後日、2人行ってきたら？」

「コナン。行くか？」

(…ここには嫌な思い出があるんだよな) 「行くよ」

コナンは無邪気に言う。蘭は、チケットを和夫に渡すとすぐに部屋を出て行った。

「なあ、コナン。もし、高校生ぐらいになったら何らかのチケット2枚あったら誰を誘う？ 気になる女の子か、それとも男友達か？」

「うん。多分、男友達だと思うな」

「どうしてだ？」

(気になる女の子を、寂しい思いさせたから)
「わからない。ただ何となく」

トロピカルランドに行ったあの日から、新一は蘭に寂しい思いをさせてしまった。それが結構トラウマになっていた。トロピカルランドに行くのもトラウマのうちに入っていたのだ。

「ふん。そっか。じゃあ、まずトロピカルランドに行ったら何に乗る…」

コナンと和夫はトロピカルランドに行ったら何に乗るか相談し始めた。

しかし、コナンは知らない。

トロピカルランドで、運命の歯車が急速に動き始めることを――

12・トロピカルランド

和夫と2人だけ来たトロピカルランド。一昨日、何に乗るか相談した通りに乗ることに決めた。コナンはトラウマになっていることを忘れて遊んでいた。そして、最後にジェットコースターに乗ることになっていた。

（すっかり忘れていたけど、20年前ここで殺人事件が起こったんだよな。俺が推理して、終わったけど。そのあと…だな）

ジェットコースターを乗り終わり、予定通りに乗り物を乗り終わった。空いているベンチで、ため息をつきながら2人は座った。

「なあ。コナン。トロピカルランドは嫌いか」

「嫌いじゃないよ。和夫兄ちゃん」

「そうか。お前、ジェットコースターに乗る前に、苦笑しながら乗っていたからな。何か、ここで嫌な思い出があると思ってな」

「な、ないよ」（それが…あるんだよ）

「そうか」

2人の間に沈黙が流れた。和夫は耐え切れなくなって、コナンにトイレ行つてくると言うのとどっかに行つてしまった。

「確か…ここで、コナンは誕生したんだよな」

コナンは小さい声で呟いた。

一方、和夫はトイレに向かっている最中に怪しい黒ずくめの男たちが怪しげな取引を目撃した。探偵として見逃しておける訳がない為、取引現場をばれないように見ていたが背後から襲われ意識を失ってしまった。

「兄貴。どうしますか」

「APTX4869を飲ませるか」

和夫は、かつて新一が飲まされた薬を飲まされてしまった。途端に、体が熱くなって来ていた。

「ラク。取引は終わってないぞ」

ラクと呼ばれた人物は、呼んだ人物にぶつくさ言いながら去って行った。

和夫が気がついたときには、怪しい黒ずくめの男たちはいなかった。

12・トロピカルランド（後書き）

というか、トラウマになってませんよね。

映画で平気で、トロピカルランドに行っているんですから。勝手に設定してすみませんでした。

13・謎の少年コナン

和夫が気がついたときには、怪しい黒ずくめの男たちはいなかった。しかし、彼は気付いていない体が小さくなっていること。

「和夫にいちゃーん」

コナンが叫ぶ声がした。和夫は急いで向かおうと思っていたが、自分の体に異変が起こっていることに気がついた。体が小さくなっていたのだ。和夫は急いで家に帰ることに決めた。服がだぶだぶだったからだ。

「とりあえず、母さんに話さなきゃ」

一方、コナンは和夫を捜していたがもしかしたら先に帰っているかも知れないと思い搜索を諦めた。コナンが諦めようとした時、服がだぶだぶで頭から血が流している少年が急いで走っているのを見た。その少年の顔は、和夫にそっくりだった。コナンは一瞬にしてわかってしまったのだ。その少年の正体が。

和夫が工藤邸がもう少しのところで、コナンがサッカーボールを蹴りながら待っていた。

「APT X 4869」

「えっ」

「黒ずくめの男達に、飲まされた薬だろ。薬品名は間違っていないはずだ」

「どうして知っているんだ」

「組織の人間は、取引を表の人間に見られると殺したりする。もちろん、周りの人間もな」

「え…」

「そのために、小さくなったら偽名を使うんだ。大切な人を守るために。本当の自分を捨てないといけない」

「偽名？」

「APT X 4 8 6 9 の効果は、細胞の自己破壊プログラムの偶発的な作用で神経組織を除いた骨格・筋肉・内臓・体毛それら全ての細胞が幼児期の頃まで後退化する。つまり、どんな大人でも幼児化してしまうんだ」

和夫は目の前にいるコナンは、この六日間で知ったコナンではなかった。完全に違う“誰か”だった。和夫が知っているコナンは、無邪気で小学1年生のはずなのに知識量が大人顔負けなコナンだった。しかし今は、無邪気なコナンの姿がなく大人の口調で淡々話している。

「子どもの君が、どうしてそんなことを知っている」

「お前と一緒にだ。無駄な好奇心で、こんな姿になってしまったただだ」

「君は、何者なんだ」

「江戸川コナン…探偵さ」

コナンは当たり前ながら笑いながらそう答えると、阿笠博士の家に向かう。

「その薬を作った張本人と、俺の正体と組織について全て話すよ。今日は、灰原が休みの日だしな」

「…俺の正体？」

和夫はコナンが言ったこの言葉に微妙に反応した。普通の少年ではないことはわかってしまったが、さらにその上を知ることとはかなりこの少年は大人ではないかと推測してしまう。コナンは平然とした顔で、阿笠博士の家に入る。和夫は戸惑いながら阿笠博士の家に入る。

「博士―灰原―いるか―」

地下室から灰原が出て来た。和夫は灰原に恋心に近いものを抱いているが、幼馴染の久村桜に嫉妬されそうで怖いから隠している。

「何かしら…工藤君」

「お、俺の…」

「灰原、おめえが言った通りに組織の残党は動いてやがる…」

灰原が言った“工藤”は、どうやらコナンに向けられたものだった。和夫はどうして灰原が、コナンに“工藤”と呼ぶのか気になって仕方なかった。

13・謎の少年コナン（後書き）

どうにもこうにもなっちゃえー

コ「ふざけんなよ。作者」

和「俺の体はどうなるんだよ。それと、コナンの正体を教えろよ！」
作「それは次回まで、お待ちください！」

和「おいおい…しめるなよ」

どうやら、コナンより血の気が多い和夫でした。

14・偽名

コナンが灰原に耳打ちしながら話している。和夫は何でこんなに仲が良いんだろうと思っていた。年齢は明らかに灰原の方が上だ。だけど、コナンは“灰原”と呼び捨てにしている。この2人は、何かしらあるはずだ。

（きつと…恋人同士で、下の名前で呼ぶのが恥ずかしいからだな
苗字で呼び合うのは）

和夫は勝手にそう解釈したものの、数分後には解釈とは違うことを知ることになるのだ。灰原とコナンは恋人ではない。分かり切ったことだが、灰原にとってコナンは失恋相手でコナンにとって灰原はコナンのパートナーでしかなかったのだ。

「灰原から許可ももらった。全て話すか」

コナンはそう言うと、和夫の真正面に立った。

「これから話すことは、自分の命と周りの人間の命に関わることだ。真剣に聞いてくれ…和夫兄ちゃん」

「え…コナン」

コナンは和夫がいうことを無視して、話し始めた。

トロピカルランドでのこと。組織のことと灰原のこと。20年前の中途半端に組織を潰したこと。解毒剤を使って元の姿に戻ったが、風邪薬の成分が解毒剤を覆い尽くしたことにより江戸川コナンの姿になったこと。

コナンは、蘭のことを彼女といい自分のことを彼氏といって話していた。

「彼氏の正体は…この俺。江戸川コナンこと工藤新一」

メガネを取り、最後に自分の正体をばらした。和夫はこの六日間音信不通だった父がすぐそばにいたことに驚いた。

「さてと、和夫。お前、俺に瓜二つだから双子だといわないと蘭の家には居候が出来ないと思うな」

コナンの言うとおり、和夫とコナンは瓜二つであった。コナンがメガネを掛けていないと見分けがつかないといっても、過言ではなかった。

「江戸川…江戸川…江戸川ドイルとかどうだ？ 江戸川コナンの親はホームズが好きというキャラで通っているから」
「…うっ。何かやだ」

和夫は灰原哀の正体をしてしまっただけでショックを受けていた。自分が恋心に近いものを持っていた人が、犯罪者だったことを。

「とりあえず、その前に俺の服でも来てこいよ。ぶかぶかの服だと嫌だろ？」

「あ…まあな」

コナンはもしもの時のために、博士の家に服を置いていたのだ。それを、和夫は着た。ちょうど、その時に誰かがドアを開けた。

「博士！コナン君知らない…あ、コナン君とそっくりな」

「え…江戸川乱歩というんだよ。蘭さん。僕の双子の弟だよ」

「あ、あまりにもストリートな名前だね」

「今日、外国から来たんだ。僕と一緒にじゃないと嫌だ！　とこねてね！」

咄嗟にコナンは嘘をついた。和夫…乱歩は、戸惑いながら自己紹介を行う。

「ぼ、僕は江戸川乱歩。本当にストレートな名前だね。だけど、コナン・ドイルのドイルとかつけられるよりはマシだけど」

乱歩はコナンを睨みながら言う。

「乱歩君は、どこに泊まるの？」

「まだ、決まってないんだ」

流石に、女優の孫でもある様で演技は得意なようだ。

「じゃあ、乱歩君も一緒に居候する？」

「いいの？」

「いいよ。コナン君の双子の弟なんだから」

「やったー」

「…おい。落ち着け乱歩」

「あ…うん」

乱歩は別名で呼ばれることに、違和感を感じながら頷く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9633n/>

江戸川コナン、再び

2010年10月12日18時48分発行